

多剤耐性緑膿菌院内感染報告

ICT

○ 有瀬 和美 上原 良雄 武内 世生 竹内 啓晃
 杉原 重喜 弘瀬 裕子 水間 美智子

【はじめに】

当院では、多剤耐性緑膿菌（MDRP）が検出されるたびに遺伝子解析（PFGE法）を行い、院内感染の早期発見に努めてきた。今回、MDRPの院内感染を経験したので報告する。

【経過】

2006年2月、入院患者のAさんから2004年調査開始時から10例目のMDRPが検出されたが、これまでに検出された9例のMDRPとは遺伝子型が異なっていた。2006年4月、Aさんの退院3日後に同病棟へ入院したBさんからMDRPが検出され、PFGE法でAさんのMDRPと遺伝子型が一致した。院内感染を疑い伝播状況調査を行った結果、4名の入院患者から同じ遺伝子型のMDRPが検出された。また、環境調査の結果、ポータブルトイレバケツ洗浄用のスポンジ、およびスポンジを保管する容器から同じ遺伝子型のMDRPが検出された。同病棟内の当該MDRP非保菌者を対照に行った疫学調査の結果、当該MDRP保菌者は、1. 女性患者および、2. ポータブルトイレ使用患者に有意差を持って多いことが判明した。以上より、ポータブルトイレバケツ洗浄用のスポンジを介してMDRPが院内感染したと考えた。

【対策】

ICT主導の下、診療科・病棟合同カンファレンスで、以下の感染対策を決定した。1. 手洗い、標準予防策と接触感染予防策の徹底・強化、および実施状況の監視 2. 抗菌薬適正使用の推進 3. 洗浄ブラシのディスク化 4. 洗浄ブラシによるポータブルトイレバケツ洗浄を中止し、ベッドパンウォッシャーによる自動洗浄に変更 5. 排泄物処理手順の作成およびデモンストレーション 6. 当該病棟の入院、転入、転出を禁止 7. 環境整備の見直しと清掃業者による清掃の実施状況の監視

【結果】

その後、1. 当該MDRPは検出されなかった 2. 手洗い遵守率、速乾性手指消毒剤使用量は上昇した 3. カルバペネム系抗菌薬の使用量は激減した。

【結語】

適切な感染対策を早期に講じれば、MDRPの院内伝播は阻止できる。

〔平成19年2月22・23日 第22回日本環境感染学会総会（横浜）にて発表〕